

学びのコミュニティ研究所 第2回

平成 28 年 11 月 12 日 (土)

15 : 00 ~ 17 : 00

松山市総合福祉センター4F

ボランティア研修室

参加者：讃岐・村上・西村・堺・グローバルネットワーク竹内代理・仙波・遠藤・長島

1 所長あいさつ 讃岐 幸治

学校のスリム化は、逆にすべてを学校に詰め込んでしまった。なんとか、地域に戻さなくてはいけない。総合的学習の時間をつくったけれど、教員の仕事が軽減されるどころか逆に忙しくなった。地域の中の施設としての学校という捉え方をしていく必要がある。今は、地域の活性化のための学校という動きがあるので、学校は地域と連携せざるおえない。学校を地域が揺さぶる。

前回の論点は、コミュニティスクール・ネットワーク・郷土学・ソーシャルキャピタルだった。

村上：地域教育とはなにかがわからない。

讃岐：学校・家庭・地域、全部含めて地域教育と呼びたい

村上：問題は、なんのためにするか。今の教育は、地域人ではない他所から来た教員がしている。忘れて去ったのは地域性。唱歌「ふるさと」が流行しているが、子どもの中からは消えている。どうすればいいか。寄って立つものは、自分が育ったふるさとである。ふるさとのない人は新しいところで流される。グローバルな視点が脚光をあびて、田舎が忘れ去られている。松山で言えば、番町小学校の子も、雄郡小学校の子も同じような、スタンダードで育たなくてははいけないという教育である。地域性を無視している。何もかも同じマニュアルでするのはおかしい。もう一度、見直さなくてはいけない。政治的イデオロギーとは違って、基本は何かを考えなければいけない。

讃岐：地域の価値再発見、全国地域学サミットで講演した。地域学をしないと、アンディンティティが育たない。

村上：そのために、地域と学校が手をつながないといけない。

仙波：子どものアンディンティティが育たない。学校は日本の基準を教えるが、ローカリティがない。体系化していかななくてはいけない。

堺：日本の特色は、おたやんあめ。(どこを切っても同じ顔が現れるあめ)

仙波：各学校で、それぞれ違う教育をしていると思っていたが、2,3 年経つと同じマニュアルである。久米地区の小学校でも(米作りの盛んなところ)田植えをしましょうと。おかしくはないか。ノウハウがないとしか思えない。

村上：方向性がないのでそうなる。

西村：教育委員会では、方向性は示されていると思うが、どうやって学校が運営していくのか、すべての

学校の共通項はどれで、個々の地域性を生かした教育としてはどうすすめるのかとか、共通の土台がない。では、地域の皆さんと、同じ情報を共有して、それをどこでするかという、子どもを守り育てる協議会、いじめ問題協議会、学校評議員会、学力推進協議会等、会議はいっぱいあるが、そこで教育全体のことを考えるというダイナミックなことは話されてない。学校運営協議会では、日吉の子どもたちに、どのような教育をしていくかということ話し合ったが、ダイナミックな議論までにはならなかった。学校評議員会で意見を出したとしても、共通ビジョンまでもっていきとすると、また、違う会をしなくてはならない。校長としては、来ていただいてありがとうございましたで終わってしまう。青少年育成委員会がある地域では、子どもづくり、学校づくりをしましよと活動しているところもあるが、ほとんどは実現まで至らない。話をする組織がないと実現しない。学校運営協議会を中学校まではつくることにした。学校、家庭、地域、同じ思考でというのは難しい。

遠藤：運営協議会をつくっても制度としては残らない。

西村：ほかの協議会、例えば守り育てる協議会を止めて、一つに統合するといっても、教育委員会が認めないとできない。すべての協議会を統合化して、学校運営協議会にするといい。組織づくりをしていかななくてはいけない。そのほうが、いくつもの協議会に行くという負担軽減となる。しかし、また、そのための委員会が必要になったりする。

遠藤：そのためにも、地域教育が必要、すべてをひっくるめたネットワークとして。

西村：文科省はさかんに協働という言葉を使う。ビジョンを共有して役割分担をする、行動連携は学社融合・連携でした。協働体制構築といっているが、学校ではまた、何かしなくてはといけないと思ってしまう。地域、家庭、学校教育が、役割分担をきちんとしましよということであれば、学校も理解できるのでは。

讃岐：連携は分業理論。しかし、行き詰った。それで、一度ごった煮にして、分けていけばいいのではないか。分業理論を前提として。そうしないと、イノベーションが起こらない。新しく考えて動く、これが、協働の論法。一緒につくりあげていながら、家庭は家庭、学校は学校、地域は地域で考える。

仙波：学校を乗り越えられない。新しい手法を提案するときに、協働やビジョンの共有をしても、学校教育目標は学校が考えて地域に発信する。地域の評議会と一緒に作るというスタンスがあってもいいと思う。

遠藤：教育目標を作成し、公表するのは5月明けなので、地域の人と話し合ってからでは間に合わない。

仙波：具体的なやり方は一緒に作らないとわからない。

堺：このようなことが、なぜ必要なのかということが、一般の教員には受け入れられていないと思う。

仙波：マニュアルもないしね。

讃岐：「なんのために」するのか、全体で考える。その上での仕組みづくりが必要である。気持ちと一緒にならないといけない。地域教育は何をねらうか、目標の共有化とよりどころ等そのあたりが大切。

村上：学校は学校の目標がある。地域は地域人として、どのような人材を求めるか。ここが同意できれば、任せるのではなく、話し合っ、仕組みづくりをしていくといい。

仙波：公民館は子どもの課題等が入ってこない。

村上：公民館は公民館としてこのような子どもを育てたいか、学校は学校としてどうか、それぞれ持ち寄って議論する場がある。

讃岐：学校目標みたいなもの。両者がいろいろ考えて、得て、持ち寄る。5つの「ティ」

セーフティ、アミニティ、ヒューマニティ、バイタリティー、アンデインティティくらいは、抑えていないと。

村上：そこからスタートして、議論するというプロセスがなかった。

仙波：なぜなかったのか。

讃岐：しないようにしてきた。「ふるさと」を忘れさせるのが日本の教育だった。

堺：そして、過疎化がはじまった。

村上：これは、成功し過ぎてしまった。もう一度見直すときがきている。

讃岐：明治維新当時の藩に戻したらいいかもしれない。

村上：あの時代のほうが、多様だった。

仙波：ふるさとを捨てて都会に出て、ホワイトカラーをみんなが求めた。

堺：変えるには、産業構造を見直さないと難しい

村上：みんな、古き価値観に染まって。新しい価値観を模索しないと。

堺：本気で考えている人はどのくらいいるか。

仙波：今回の、アメリカ大統領選挙など見ていると、民主主義がどういうものだったのか、どう流されていくのか、方向が見えなくなっている。

村上：メディアにのると、押し流されてしまう。押し流されない人間を育てないといけない。

現代人は歴史性を喪失して、目の前の出来事ですすんでいる。歴史を無視している。郷土教育は、時間の流れの中で自分の存在を見ることができる。過去の時間を無視することは、非常にしたたかなものを植え付ける

讃岐：マグロは世界中どこでも食べることができる、休みなく動く回遊魚。人は休みなく働いて現在に至っているが、もうすこしゆっくりしましょうということがないといけない。アンチテーゼとさえいえないか。

仙波：話は違うが、学校のイチヨウの木のことですぐに学校にクレームがきた。どうするのかと聞いたら、教育委員会と相談しますという。どうして地域のひとと相談しないのか、わからない。

村上：それが怖い。木一本動かしても地域の歴史を動かしていることなのだが、今はわれわれの時代とは違う。校長も退職する年齢は新人類といわれた世代。

西村：以前に比べたら、その地域出身の教員がいなくなった。どう学ばせるか、地域の力にお願いするしかない。

村上：コミュニティ・スクールにおいても、そういう教育がいる。

西村：はじめは、「信頼される学校づくり」だったが、「地域創生のための地域づくり」となった。地域アンデインティティをどうつくっていくか。乱立している組織の中での問題点である。コミュニティ・スクールも、東京や京都がスタートで成功した。その事例を愛媛に持ってくるのではなく、愛媛は愛媛版のコミュニティ・スクールをどうやって発信するか。共通認識する場をどこかでつくらないといけない。議論は学校で何かの組織をつくってできると思う。愛媛版学校運営協議会等、議論をする必要がある。

仙波：地域に 20 年ほどかかわっているが変わらない。どうするか、方法論があって組織があること。コミュニティ・スクールは全国いろいろあるが、手法だけ取り入れてもだめ。

讃岐：理念を掘り下げないと。

村上：指導要領とかいうもの。文科省はそれがうれしい。愛教研等で話し合っ、深めていかないと。

遠藤：愛教研とか、教育会とかが

村上：愛教研が、議論の場をもって、他の人の意見も話も聞きながら、議論を1年2年と深めていけばいい。

遠藤：座談会はあるが、広まらない。

讃岐：お互いが同じ土俵に乗らないと。

仙波：上から言われたことをするのはいけない。西予市の教育事務所の人は、生涯学習課と話したことがないと言っていた。

西村：市町教育委員会では、関さんのように推進する人、および腰の人などいろいろな人がいる。提案して愛媛県教育委員会からやめとけといわれたことはない。県教委のコメントは、歓迎しますとのこと。スタンズとしては、市町の教育委員会のことは市町に任せるとのことだろうと思う。市町村は県から言われていないのにしていいのかという捉え方もある。

地域の郷土学を学校が受けてどうしていくか。市町村の教育委員会とどう協働していくかが問題。

堺：県教育委員会は、市町村の主体性を尊重しなさいと言っている。

讃岐：統制原理から市場原理へ。勝手にやらかまわれない。いいところがあればチョイスする。

堺：県の学校教育課長と生涯学習課長は連携がとれるようになった。壁がなくなってきた。しかし、部下の方が堅い。

仙波：西予市ももっとリンクしているのかと思った。

村上：教員が教育長をしているようではだめ。

西村：以前、生涯学習課に学校支援地域本部を、学校教育課にコミュニティ・スクールをしたいといったら、ちょっと待ってくださいと言われた。廣田さんに、社会教育と学校教育は壁がさがったように思えるが、ほんとうに下がったのかとお伺いしたところ、市町部局と学校教育の壁はなかなか難しいと言われた。垣根はとれるのか

讃岐：総務でなく、政策課。そこでないと。

仙波：教育センターは

堺：教育センターは社会教育分野に理解がない。

村上：鎧をきているほうがらく。

堺：異分子がはいってくるのをいやがる。

村上：文科省からだとは広がるかも。

グローバルネットワーク職員：NPOからみると、学校は敷居が高い。初めていくところとかは特に。先生は、関わったら仕事が増えるとも思っているのかなと思ってしまうことが多い。

堺：手間暇かかるじゃないかと教員は思っている。

仙波：地域の人とかNPO関係等に頼むことが下手

堺：教員は、誰かに頼むと自分に能力がないと思ってしまう。だから、一人で抱えてしまって精神性疾患になる人が多い。

西村：コミュニティ・スクールをしてよかったと思ったのが、コーディネーターを雇うことができたこと。職員室配置にした。この仕組みにして、垣根を取っ払ういいきっかけになった。宇和島市で6校。少し思考が変わって

いくと思う。

讃岐：島根がその方法。

仙波：今回の地域教育実践交流集会では、コミュニティ・スクールの事例発表がたくさんある。

村上：コミュニティ・スクールに興味のある教員が少ないのではないか。

西村：学校事務職員をコーディネーターにという提案がある。コミュニティ・スクールでの要望等ストレートに伝わりやすい。事務職員の方が教員より見識が高いことが多い。

—休憩—

次回およびお知らせ

第 18 回「学びのコミュニティ研究会」

日時：平成 29 年 1 月 22 日（日）13：00～17：00

場所：にぎたつ会館

議題：地域ぐるみの教育とコミュニティ・スクール

講師：廣田 貢氏

講演終了後グループ討議

予定動員数：60～80 名程度

学びのコミュニティ研究所 次回 3 回目

1 月 7～8 日 鬼北町にて宿泊研修

議題：第 18 回学びのコミュニティ研究会の打ち合わせ

四国環境パートナーシップオフィス（四国 EPO）より

ESD 四国地方センター設置に向けた関係者ミーティング参加のご案内

日時：平成 28 年 12 月 8 日（木）13：30～17：00

場所：新居浜市立あかがねミュージアム多目的ホール